ロ 13
3062
2 止

島田藏書

太上感應篇俗解下

形人之醜訐人之私

醜とは人のみせまじき形跡は恥かしき事ゆへ
おもひ隠して是とかくさんとするを外様へ
もらし語つたへ、まして人の恥とおもふ事を又人の
内證ありてひそかに行ふ密事たる私事を犬と
いまだ耳立ぬ事を言ひ触らし、あばき発
く他人の知らぬと悦ぶ今の人々の上
をたまくもなき事なれども論ありて我
に悪性あるやうに知らせて謗るべし

門 18
3062
2

耗人貨財離人骨肉

人の家の若輩なる者たちどもび集めいざなひらく遊興の媒となりて家の金銀をつひやさん事を専とせり又ハ親子兄弟の骨肉の交りの中をさまたげなどハ口論喧嘩をさせくるしめさせと悦ぶ人あり。

侵人所愛助人為非

人の所愛といふハ他人の喜悦するへ及び器の類までも。ひそかに是を侵盗て己の物とせん事をねがひ。尚又人の非道をすゝめ謀

とじむる事をはなはだしくて。都て其にカを合せ悪を助けんと黨を結びとさる此者ハ六欲

逞志作威辱人求勝

人をはやましむ罪科かろからず。

古人の曰。志不可満といへり。中人以下の人ハ我志十分に満ともまさバ好むれぶありなきをハ日ごろ驕矜く汚り道を背く事遠し。愚人ハ是をしらずして我志を十分にみたさんとして威勢を振ん事を好む。是小人の富貴ある居すれんの理也

凡人とハ恥辱とおもひて肩ハ人の中すぐれん事をのぞミ求む。夫も聖賢ハ我才智とくらし技藝を謙退して向の人を察して我ハ劣り人におよばぬ事とおもひてしりて他人の能とこゝを徳と称し才を貴で賢こそ。能をかくれしと我威をなし。凡人を辱しめ人より勝し求るかれハ聖人のふかくいむ所也。

敗人苗稼破人婚姻。

邑田構なしどとも人の自分なさとて人の辛苦として稼る苗を。或ハふミこわしを。或ハわざともくろミかなしずするハ悪逆なる事也。又男女ハ婚姻によりて配偶なして和合す。然るを何方より付くる己が恨あるにハむざうにて其間を防ぐも婚姻を破る事。縁事甚しき家親族なりしに媒妁して婚姻をなさしめは実を以て告ず偽にして偽りとやかましく人を誤らしむる事なかれ。

苟富而驕苟免無恥。

富ハ二ツあるべし。先武士ハ奉公の功を積て禄を受く。其農冨。百姓ハ耕作の

情とおしく富。商賈ハ賣買ふさとくして
其富の類ハ。義ある道をとくれ事なきをいふ。
祿あらくハ志の道をしかる又士農工商もいづ
理を捨く利の眼を付くれバゆそうかうか
と。苟富とハかへるなるも。世人ハ義理を
わしらずにしわて。其前の富をうまうもとく
驕傲くし不衣不衣とくじ見。我分限と忘
れて花奢とぬじ是こそ家と破るの道
なり。論語ても富而不驕と孔子もいひし
給へり。中人以下のものは尤あやうきなり

まうせて。我知らずて驕り我が事多し。毎毎
家名をとりて見んとく是を慎べし。
況りや人の生死利害ハみな天命にてきまり
付。貧賤なる者も災をまねく富貴なる人
も。又定まる命とのがるまじく死と
まぬかれんとしても。天ハゆるし給ふまじ。
愚人ハ是の理を知らずして。災いを招い
く利をむさぼり。可死傷とのがるまじく
其理なり生をさし惜みかくる天
命あまいバ。連不可道。然れバその生死利

害れ宝る事をねしくさぬくし求るよに、あるさの恥辱をとまたかもそしりと嘲らるるし深き愚昧なよりおこる見とき浅ましき事也。

認恩推過嫁禍賣惡。

認恩とハ人の恩を認て我恩とするもなり。人ハ忘恩の者のよりまくあるべきさ事なれバ主君ハさんへり高恩あるとそれを中にく我恩いうごとくへと悦ごしめて己が功とし又我過をバ却て人

推課とハ己が過のあるをなすりておしつけて人に善とハ我善にして家悪をバ人の悪とせんとする者也。凡侍ハ主君のまへりかざらずして切の人ハ文学ありとも意あるべき事也。況して人ハ己が身の禍と他人へ嫁して我身とのがれんと。嫁とハ女と人の嫁へむさまでも嫁娶さるるがおごとく。禍と他へゆかりくるとも文我身の悪きの院りにもるし時ならびそれにて悪事と化人に云課かてしへバねと人へり賣がことく悪すと化人へ小讓るも也。此二句の中人のなし

沽買虚誉言包貯険心。

あきなひする者ハ痛に投せられし者といへども虚誉ハむなしき浮言にして我身にふりく実の行ハなきおもりかといかざり名めきてをくせとわざむさ人といひけるも外にまくねうきとして人ぞと称して向ふ事あり是を商人の贋物とてもひかざりて沽買するがごとし。次りハ内の腸ハなるほど険しくして人を害せんと陥と思ふ悪心をハ包貯へて人ある伴に見えさる也。

拙人所長護己所短。

拙人何にても一能一藝ありて我人に越たる所を長として其もの事一たび我舎をまくあしく淡太しき消え世間の人の知る所なるにしく計るかなり。極く己り何かそしらぬみくふ及ハわるとも人の見とも知ぬへさうしき大事に至る也。掩護るを悦ひせ。

乗威迫協脅縦暴殺傷。

手前の威勢権力あるをもて威をりせらして他人りせまりとびおどしていくむれる

ゆく人の上に居るべく。人の首長となりてハ萬民の我
よりも下なる者に至迄て礼義を正し
く守るべき事にて。上の威と備權と恣く人とい
へども久しからずとかや。されバ悪人ハその身の極なる
出しもれハ縦暴逆をなしくらしく人を殺し
傷ふもの也。

無故剪刀裁非礼烹宰。

凡綾羅布帛の衣類ハ是を位くわけて下たし
くよろの服ととゝのへしに。又下たる者と
ても可着時にあらバ。礼といふものを開て是

と若さる事あらバ何の故なくし
く絹布とさり当らく自の身をかざるハ。
是礼義の背き。且又豊かなる人にバ。次
第なりとも。ふかく賓客の為り鬼神の
祭。又ハ老人の養ひなれ。禽獣を殺して用
ふるのみ。故に古の聖人礼を制して定さ
其に用る事を忌むとて礼に背きく
烹宰して。我身の驕とふとむ凶悪なり。

散棄五穀労擾衆生。

夫五穀ハ米。餅米。稗。麦。粟をいひて是皆人を

幸ひ不才のものなるハ、なま貴き一般のものとかろく賤
糟にくるしむことなきそ不あり。また費ハ、愚人の
業なり。況り衆生とおなし一人なるも畜生と
色兼ミつが労擾しハ、或ハいくらなき物
普請をねらくで此年労とさせ、ごろ餘ハ
牛馬ともらしならむ戦とぬらく多くの人を
殺し害まで是をいくらものとかくれうく
らぐらし。

破人之家取其財宝。

人の家を破りてくだる財宝を取るものハ、直な強
盗みごさたりぞされ借色小んもわらなき恣にて
人の家へいとこまく強盗とハせざれども、
官とむさぼりくてる官り君人をあへて
く己が欲を逞くしぬ。是非道となりけ
て我身の利をむるところ類ハ、ばるもの人の家
を破りまく財宝をとるなる盗人同じ志
あらん人ハ能く考ぬへし。

決水放火以害民居。

色者ハなも強盗山賊のなすところの業なる。決水とハ
俄に畳へ水をおとして海河となして村里をそこ

みなしひ。たゞ火となれバ何くも居宅を焼るゝなり。

悪逆なる事ハ天に及べからし。

紊乱規模以敗人功。

規模とハ則法度なり。凡上たるあらん人ハ、前より法令を正しくもてバ、尚の人の功大小甚り如才もて露かりく前廉に先法令を乱すハ人の功を屈ぶ身を捨るなきもの也。法度立ざる時ハ何と用て功と知るぞんや。

損人器物以冤人用。

器物ハ人の用く一切の用を便むる物なりき。

露かりく其人の悪事を前廉に損ひ欲く

とく内ハ俄り用り立人とたる時、いきおさ

つよくべき身を察此二句ハ僅の小悪なり

とも絶とて尤くにんなさしれと知るべし。

見他栄貴願他流貶見他富有願他破散。

栄ハ栄華なり。貴ハ富貴なり。人の富も栄華ハもとより人の天命によく我かうちやうはむべきにあらず。然るを見てくハまく人と思ひ嫉く、遠国へ流したてられよかしとんり、貶も貶し謫し官とおとし

て流罪せしめられたりとかや。○此二句ハ今日の
受用よりハさまく其かしこきくハ他人の富
貴栄華をうらやむまでハなきといへども人
と忌悪事あるんぞ中人以下の人ハしらんがため大
概此ひとつにて多くハ是より悍くなりされ
ども底よりかくし心あまりしてよく富貴の人
のさかわしきをしらぬ我も其力と合て謂四言。
よくさくしまりても世をくらしかぬる挟搾して
事。数多ありおかしく其人をとり詰て此悪念
と言ふべし。○此次の二句も上と同じ他人の

富有なるを見てうらやみの心ゆゑ其業をも邪ず
なやうにと祈る事なりとぞ。

見他色美起心私之

男女ハ各配偶ありとて我妻ハ他よりもおとれるか
他の妻又ハ夫に心をかけて情をよせ我も他
と妻と芸りてもよハ是列畜生なれバ人
として心をくだきて他の美色と見て我
心を起してハむかし悪なりとぞ。是事なかる
つ其家とする所へ是胸中の一つをけがすべき
ものなりき。

貪他貨財願他身死

貪とハ欲ふかくして背り貪ふかきぞ他人の宝を貪りてハ其人の餓へ死せんバ我物となりもせんかしのと思とらましなり。是も盗人の類也。

干求不遂便生咒恨

他人の物を所望し。又ハ其ものを貰うけて其のこと求めを他人同心なくしてかへつて遂ざるをバ則其人を咒恨。是等ハ皆小人の心也。

見他失便便説他過

他人その悪しく彼と失ふくに仕合なる事あらバ

則其咄節とりてくゐのまゝの過とかぞへ立て世間へ説ちらして譬へバ一門を挙かりて主君の心入よしあしなりともろく人ゑし僕に主君の前とてそこうしなどすり附悪人へら僕とかくちくて他人の過とへかり告てよく二心ある者の前にて遠ざかる事とならむ。餘是もりてなかれ。

見他體相不具而笑之

体相不具とハ五体の中いづれぞ全からずむしく片輪なる者をとらへて是と笑へ其れ

ハ弟兄の間なれども危し。又外の形ばかりにかゝはら
ぬ人とても論ずる時ハおほくハまけなり。
我ことハならんといふ人のこゝろを笑ふべ
きなるべし。

見他才能可稱而抑之

前に推人所長とくハしく筆のうへにしるせ
なるが爰にいふハ他人の才能の稱すべ
きことがらをいはぬとて抑へて消さんとす
るをいふなり。

埋蠱厭人用藥殺樹。

蠱とうけじとても治しがたきハ人の蠱より
ひそかに人形とうげをさしぬくの符とるき
くのろひハなミての妖怪ありといへり今ハ
鄭りし調伏の法ハ此類なりとかきら。
なりハ他人の植置たりし毒藥を用て
たる木を枯さしめ。害を生ぜし惡なるなり。

恚怒師傳。詆罵父兄。

師傳とハ師匠と傳とならびし師傳ハ嚴密に
より我を教ふるかおのれなまじひぞむきへ教ふるとも
ともせめく敬ぐべき教を受べきに今

小さういく却く師傳りもく悪口狼藉の言をと吐く恚怒又ハ父母兄長り向て挫觸し主とうして悪行の働をとなす損悪れ人のふるまひなり。

強取強求。好侵好奪。

強取とハ他人の財宝を無理り強ておさへ元り強求とハ何事にくも他人の同心でさふうりとも是非をうまいを求兄又喝と熱く他りもれなどと侵奪事とぬむ是等しき悪逆なり。

摽掠至富。巧詐求遷。

至富とハむ玉掻乃とみ福人ハ是ハ兵乱の时のミかゞりに乗じて富人れ財宝を掠取おもひハそくに偽とかざりく官職とかもを求む。遷とハ出世する事なりこの友に遷とこへり。

賞罰不平。逸樂過節。

又善人を賞し悪人を罰するハ平なる賞罰なり。左れおとしさの悪人ハ賞すべき者をハ却て罰し罰すべき者をハ却て

ゆるし。従ふものを賞して。是則不率ならぬなり。

○逸ハ安逸とてほしいまゝにあそびたのしむを云。

楽ハたのしむ事なくてハそのつとめもいふぞかし。逸楽

となるハ人情なれバ。悪とハいふべからず。

されど安逸にも楽しむにもそのほどほど

くのあるものなれバ。これを節に越るごと

く逸楽となさむハ。心に天理に背なり。

苛虐其下兇嗃於他。

是上よりあまねく人をいましむる言なれバ。人ミ

な位にして。ハ下を恵養ひて。分くの利を

ゆるがせにすべき道ならねども。凡下に居者は

上の為に辛労し骨を折ことの人を

養ひ。上たる人ハ心を労し氣をつかひて

下なるものを治め恵む。されバ位の貴

賤ハかはれども功をかたむる事ハ同じ。然る

に今日我ハ施ひを貴にほこるべく。

これ下の者にハ苛政をおこなひ暴虐なる

治をなさしめバいかんぞ天道これを許して治

らんや。然バ人ハ他にむかくハ寛厚を厳しく恕を

わすれじ。人を詈く他の人とおもひて かりそめ

しかるに聖賢ハ身に徳ありてやすらかなるが
不威自然と恐しき眼して。斧鉞ありとも
尚おそれ向ふ心なし。自分に徳ハそなへたる人ハ
くこころ須をもつて。耐地をもつておそれまで
かんとする心ハ。心ある者乃疑をおそれなり。

怨天尤人可風罵雨。

徳なき人ハ天命に安んじて。いつ頃乃困窮難儀
にとりひそまつへ一命をも擲て我身をかまえ
ずる乃難を生じても後悔まする事ありし
是皆命あるを知らざるより。愚人ハ

は命をまもる故なり。仕合よき運にあたりてハ天の
ゆへとおもふを得して過ちて天を怨。我思し
きれをもつて他人を我と捨て附ハ却て向乃
人を尤むる乃類なり。隠れ第一迷ふごと
にて。天よりハおもひもよらざる事也。徳をすてめ家
にありて敬幸なるまで恵み乃外乃天の福
を得る人事にしてハ行跡正しき者をバま
称ざる人を敬して自ら親しむ。是
理乃常にして天のなすわざ。後生を同
じ身を背事を知らでも天とうらむ人をむきハ

此天命なると知らざる事也。風雨ハもとより陰陽の気
のなすところなれバ、是又わざわひとなる事ハ避かたき
ことなり。しかるを我心よりせむるごとく風雨と
ちからいふハ誠に狂人の類なるべし。

闘合争訟妄逐朋党

是小人の交ハりのごとし。此乱義を知らざる
故なり。仮初のかね合にもむつかしくいひつのりに
悪口雑言をいひ、後ハ小人を罵言赤面して
喧嘩口論になりて、ふたゝび闘合といふなり。
こゝよりハ上へ訟事も起るべし。又君子の

交ハ淡して水のごとしといふて、始より別れ
ることもなくして味もなくして淡なりといへども
其事なき小人の交ハ耳如醸とて、初めハ相合
ハうるはしきやうなれども、後ハ別れ悪しく
なる。故に酒狂人の寄合のごとし。
く君子小人の交をしるべし。扨又朋友ハ
心をつくしてもなくてハかなはざる物なれバ
知ある人の交はりハ人をたすけ
益友なりと親しまるべし。損友なりとはいひつゝ
なし。御に小人ハ何の遠慮もなくむしうし朋

黨の交りとなることを避てこそにて遁
れと過ることゆるがせなり。あまつさへ朋黨の教
を求るが故なり。その氣に入ざる時は纔に
その交りを絶。又中果て人の為に咎
をうくる。是始め知らずして交りをなす事を
求るが故なり。

聞妻妾語遺父母訓

それ愚癡短慮なるものは女なるゆへ總じて凡
さし當りしを色にまよひ恩愛に引されて
或は本妻或は妾の詞を聞てよし父母

ともへば身をなくし終には家を破り身を亡
聞不理甚多し。然るものは聞ずして
かなしさる父母の教は捨ずして遺言を
そむく事多し。

得新忘故

是等の人ハ事といへバ己となすべく友とし
なれしく交るはなれのへさとぞ思く久しく
ても親しむべし。古旧の故なきを退けて捨
とくいふべき物とくしも大なる僻る
あらばそれとも捨べし。ちと大体をいふ時は両親

とかく其の肉の脹をとらる事なし然るに今
日我氣の邪をさへ惜みて親しみちかづき
てぞんじさる交を捨るかハ小人のえいぎなる
ものなりハ目の前居宅衣類のうつりゆきまで
身をおごり心をとりし故智を捨るハ家なる
邪氣のふさぎてよらざるなり。

口是心非

言語の吐処を聞ハ口才ある者の賢人ぶり
者の類のおぼえんとおもひしが口がち
がひにくたきハ非なる君子ハ言顧行

顧言とて言しく行ひと相違あれバ恥べき
ことを知らしく言語を述れバ才あるごと
く通りつかう行を見るかむかし時ハ口にひかるゝ
ゆゑよく言ひとしく言をとりたがハじとぞ
言行のそろふとバ君子といふべし。

貪冒於財欺罔其上

我利欲と望しく他の財を貪くハ偽ま
じきれと思ひて利をむさぼる者ら
我一人のかしこけれハ官長の人をもあなど
りあやまて其の事を我好むなり

引入る也。欺とハだまして事を罔なふなり。
向の聞んゆへなりと。是非をしらしむるゆゑとしるべき也。

造作悪語讒毀平人

悪語と造とハ人の心を謂ひ経なき二ツ物を作
あしくいひて人の心を讒
言しく毀そしる事也。是悪しき強悪の
人の工業なり。平人とハつねのひとを
罵りけらしくて内にてあしくいふとかまへ作
りあしくそしる人のねたみの言をいふ

ところ廻く。或ハ主人に謀する也。或ハ朋友親しき
内にもこれを工む者也。

毀人称直罵神称正

他人の過ある事又陰悪とするある時ハこれを
内にて彼人に告知らせて
ハ直なる者なれども人の悪事をすれども
我身を直としてあらはす
論語に悪称人之悪者悪訐以為直者
直者ハあらと是皆聖賢のこゝろにかなはざる
つみとなる。鬼神の理ハ神測不測

かして危ぶむるべき事なしとぞ思へとさなく
ありそかは罵りて己が道を正しとし。或は柱
妄れ人の事也。

棄順效逆背親向疎。

されバ順逆の二つあり。ても人の向ふべきをさ
ともに方より天性と備る道とは。
自然との道理なりの本来なりの也然る
に悪人の為すものハ。諸事の業深道の
ろうと棄るいふて。逆の為りふさ別致
是を引なめ是なる者ハ親しむべき親を見
ゆるとバなる事也の。其き。却て疎遠なる人に
親しみ向ふ。是先祖逆の中にもとりわけ一層
なる也。餘事にはかくのごときなる事を知つて下

指天地以證鄙懐引神明而鑑猥事。

是唯小人愚昧の人の上の事也。鄙懐とはい
やしきおもひといふ事。里俗のいふれ事を
云つり何ごとも事あるの時ハ。我心ハ天神地祇
もしろしめさんなどといひて天地を指てハ。又
ゆきんの神祇をしも誓ひ。又あるいハ地神
氏の神の名をまひて。みだりなる事の

鑑として誓紙を書誓言をする事。是神明を
とかろんずるにあらずや。却て神明を瀆
すてふ事。愚癡の人也。

施與後悔假借不還

君子たる人施す事。皆義に當るごとく
行ふ。堯舜ハ天下を舜にゆづるも
道にかなへバ人に施す時ハ當てたくわへ
一銭も費事をおしむ。故に其人後悔する事
なし。小人ハ人の氣に乗じて施すといへども施
す依て氣もあらずして後悔するなり。

ありて人の地を借用して其地の用に立事あり
ゆるすを知るべからずやがて是を返すべし。然るを
直に我ものとして返さぬハ大過なり。

分外營求力上施設

人ハ大小上下共に分際を知りて其分
に安ずる事を易といふ。思ひ不寄處に
ひ。又中庸にハ君子ハ素其位而行不願其外
とも又君子ハ居易以俟命ともいへり。然るをし
かる分際を忘れて外の事を営求めバ禍
に及ぶ事瞳を見るがごとし。是に就て

愚なる赴おもむき士農工商としても手前の
困窮に及ぶ人ハ。もとより願を忘るゝ非
より起る者也。如何となれバ天下の無益の物
ごとく天地の間に生ずる物ハ。情をうくるの
養ハ天より賦あたへ給ふ。犬雞の類ま
で飢て死をもとめし事なし。況や万物の
霊たる人として。畜生にもおとるべきやうやされ
ば彼ハ分をまもりて犬の虎をそねやむ事
なく雞の鷹を羨むなし。是ハ其分を知
らずして些の人ハ百石の禄をもとめ千石の

禄の人にならんことをおもひ。百金の分限よ
く千金の富をまさんとするによつてことごとく
り家業難義し。或ハ難義を救為り。
邪なることを生じ。終に刑にかゝつて一族
死にとよぶ。都て君所務家僕まで一分
分を守れバ何の難義にか及ぶべき事あらん
や○凡そ世の人ハよく〳〵に明らかにおもひ
仕合とゆく身小勢力おのれよく旅人へ是にほ
多く働らくと言へ勢力のみとり尚も威勢と
ねどもさはし設くるハ。却て立の至らし。此二句お

はつとに君子たる人の分限を安ぜざる事をいふ。
後よりいへば人の分にあまる事を云ふ。

淫欲過度

房室にて多く欲を逞しくするは絶し、防ぎ守りて
わが身生命を損じて情ぐるしき身の欲をいふなり。

心毒貌慈

内心にはなさけなくほどこさず人の悪毒をふくみて外
くれの色には温和に慈ある体にみせかけて仁あ
るふりをするもの也。古語に、口には維語甘蔗。
心敵二十悪矢。ことよし。此心ある人ハ可恐の事なり。

禨食饑人左道惑衆。

禨とは食物をのぞく人とあざむきて是を食
しむ。饑とはわるく振舞のあくる也。○左道と云へるは
是妖術の道なり。今の魔法などと云へる
類なり。文も正道をはなれ奇特ふしぎを
見する事なり。これ愚に凝の族はこれにまよひ
是にまよひ邪なる道を信じて。又数
導あまたの衆をまどはしむ。

短尺狭度軽秤小升以偽雑真採取奸利。

是市中にて商人の偽りを行ふ事と云り。

むかし周武王天下をしろしめされ最初より先ハ
謹權量とて升と秤と定めたまふ。謹て政
れ第一なる人ハ偽りあり或ハ一丈を或ハ一尺へのばしれ
きりと縮し挟しく交易の法をあらそふ也。
或ハ秤の目ハ軽きを以て軽しく周の升をもて
いしく人を欺く或ハ贋ハ金を以て直ハ此ゆへ
雑賣として八菜种のごとき也ぶ人多く凡知ろ
めりあくぎそおくぞ也とも多の附へ大きに
人を害して其門の己が利を求めての
死をおそ其までいんぞ是を悪べからや。然よ

たにも右小も捷くても利とかく海
しをも永むろみは刑罰のがるべからず。でもきて
なれら天誅之。

壓ㇾ良為ㇾ賤

良とは君あ家の勤のきまぜそれを今
我權勢より募らて人をおさえて奴婢
としてやすら使事とさへ也

謾ㇾ蓦愚人

謾しあそぶれに愚人をあなどりを添そうに
もろまたも蓦とは愚人をなぶりもんらて我

心をなぐさむる是其愚人小人とハ多嫌と
是らく恵べきとぞ。家をかへり才ありかこ
つねらく翫ものとするへ。甚しき道なるをや。

貪婪無厭

利りまよふ君ハいつ雜の利とるとも。今ぞ
是へ日とにいふ事をたのしむぞ。百とおもてハ千と
のぞみぬと求くハ又万億と求むる是へと
いかくひかくすなしとハそ是。

呪詛求直

是是何ぞ事ある附像あり祈なり向ひて呪
詛しいのりて直なるん事をもとむ。これ佐なるり
邪悪の者とハ神ハ小く凡をなりいかで今
そらくへ誓て直なるをと祈る者。神ハ是を
と納受しるいべし。詑諂りて千日小雖費
淫連不至心穢者家とあり。悖て是を思惟べし。

嗜酒悖乱

酒ハ養人合歓或ハ鬼神と祭り。或ハ薬毒
と解しも能甚多し。されも是を過せバ人
の血気を乱酔なしく。日用の害となる
事又多し。故ハ愚人ハ酒ハ嗜好で

親く兄ともくあそびて。天理に悖てひと乱る。

骨肉忿争(コツニクフンソウ)

骨肉(こつにく)とハ親(ちか)しき一類(るい)なり。尤和睦(くわぼく)して相交(あひまじ)るべし。然るにふかしき念(いね)ある時ハ則害(さがい)に争(あらそひ)と発(おこ)し。讎敵(あだかたき)のごとく悪縁(あくゑん)なす。是天性(てんせい)とやぶり。且(かつ)わざはひと生(しやう)ぞ。

男不忠良女不柔順(ヲノコハチウリヤウナラズヲンナハジウジユンナラズ)

男子(なんし)ハ忠実(ちうじつ)良善(りやうぜん)の誠(まこと)をもつて本として。よろしく人下を治(をさむ)べし。若(もし)忠良なくして。或(あるひ)ハ偽(いつはり)。あるひハ暴逆(ばうぎやく)なるものハ必身を亡(ほろ)ぼし

終に家を破(やぶ)る。○又女子ハ柔弱(じうじやく)和順(くわじゆん)をなし。よく假(かり)にも家まじに事とらざるべからず。若(もし)陰(いん)なるしげく人へ逆(さか)ひて男を凌(しの)ぐ。

不和其室不敬其夫(ソノシツニクハナラズソノヲツトヲケイセズ)

夫(をつと)ハ外(ほか)の遊興(ゆうきやう)をこのみ妻(さい)より疎(うと)んずる時(とき)ハ。また一家ふ和せ。又女ハ己(おのれ)が夫(をつと)を天として遠(ゑん)敬(きやう)すべきを。却(かへつ)て夫(をつと)をおかして疎略(そりやく)なすもて。是男女の悪業(あくごふ)なるなり。

毎好矜誇常行妬忌(ツネニコノンデキヤウクワシツネニトキヲオコナフ)

矜(きやう)とハ。物毎(ごと)我(われ)がにくろ驕(おごり)といふ。誇(くハ)とハ我

我能とかに對して誇張て謙退なきと
いふなり。○妬忌とハ猜くミいむことなり
何事も他人の我に勝事をねたミて
人とおとしめ嫌をいふなり。

無行於妻子

人の家にハ父ハ子の為にハ師として凡
則也。夫ハ妻の師として訓べきなれバ
よろしく一家のものよく是を身に行ひて跡を正
しくしてぞ書るなりと云へども
皆悪なる所行く故に妻子も所行不行道

不能行於妻子とハつまこもまつなり。

失礼於舅姑

あしき人の婦たるもの悪逆といつハ禮記
にも婦事於舅姑猶子事父母と云り。
されバ人の婦たるもの舅姑によくつかふる事
自の家の父母と同じといふなり。然るを却
て怠り此礼を失ふハ天誅不可遁。

軽慢先霊違逆上命

先霊とハ先祖の霊なり。夫先祖考
妣とも祭りハ絶ず雑の供へを奉るべし。

内外の潔斎ときびしく。至誠恭敬にして
祭れバ。洋々として霊魂その祭人の前に
たまり如在ますがごとし。只一つの誠あるのみなり。
然れバ内外の精進とて。祠堂祭
器と觸穢ありと思ふ所ハ。是ぞ先霊と思ふ
くわふべからざるわけなるや。抑形ハ死すといへ
ども此氣滅せざる也なり。此氣ハ天地同
根の氣にして。いかにも清浄なるものな
れバ。我氣を清せざれバ。いかんぞ祥の氣
と感ぜんや。君子ハ是を知りて。七日以前

より内清浄として。胸中の邪氣を拂捨。
三日前よりも外清浄として。衣服をあらため
身を含地と清め。ふ浄なる觸ざるやうにし
く。祭りの當てには廟社に入まで。二念
なく霊とあがむべし。可慎可敬 ○又
一國一郷の主。むかしあるうちに人何も是上
の人なりごとき命ありハ何事によらず受
遵ふべし。是をちかへし悪逆の人ハ此上命に
違逆して。即時に禍よりかゝる人の知らず
禍ありわたれバ。則天なり。

作為無益

人ハ其心に思惟し身に行ふ事多くハ
事として損益乃二門を考見に自他の
為に益ある事なきやうと工夫して後に
益なき事をなさべし今悪人乃事
とてなすあり花靡を好み遊興に耽り
く分不相応に働かずふつりいころに
て自他の益ハなくして却て身乃災
の及ぶ事おほし益なくして見ゆとも

懐挟外心

外心とハ心をかたよせしむる事とて心ハ外也臣
ハ君父にとがむる事妻妾乃夫家に於
ける下人乃主人に於るさまに心をと一
にかくよふべきに二心をまじへてさまざま
くどらく人に流れ申して見とふ悪をなす
ことといふ也。

自咒咒他

咒詛乃事前にあり何ぞ念ふ争事など
有りハ自我身を咒迴し又他人を咒迴を
ゆるす事天理にかなふべし。

偏憎偏愛

そもそも愛と憎しみは七情の発るところにて聖人とても人たるからハあるべし。されど聖人ハ悪人を憎み善人を愛したまふ。故に大学にも唯仁人にして悪ハ悪ながら善を善とす。論語にも唯仁者能好人能悪人と人をしるにあり。寛なる人ハ我心に棄ざるなり。されども賢徳才能ある人なりとも我をそしり我を憎む人我ぬれかる人とも、ねむごろにかたしむれ悪りあしくとも、ひとへに己を愛すこれもとく我性の偏りなる故に此二つのましひあり。

越井越竈

越とハ踰るなり。井と竈とを越ておのが井と竈をこゆるハ其神あるを知らず不敬なり。

跳食跳人

食物をまたぎ跳越るものハ、必ず食物を織ぐ人の身上を知らず。必ず此れより人の且つ此が食を疎むにより其れ父とまさに都宮なりうる二句ハ必井竈食人ぞふかさしんぞ。夫礼ハ敬なるにしく。この敬を挙ぐるにときハいかなる礼をも知るとも思ひ半すぐさ

つされバ悪れそだとあり。人の命ハ左右
とゆけバ凶を忘ざるときハ自然と禍の
前より遠ざかるべし。

損子墮胎

生とあるものをそこなふ事。貪欲といへる故に
しく殺べからざる事ハ既に前にも述たり。況や
人ありおかくとやや子を産しかるにかれ男
子女子とともにゆゑあり。その貪窮と厭ひ
又ハ養ふに倦く。是を殺しそれの事なきし
と云悪人偏にふるまひにあるぞいりハいま

ご偏産ありむまざるハ前にもいへり。毒薬を用て
胎を堕。是又産する親の子をおろすそれハ
よろしからず。右ハ二つの天理の不容親がか
らだをそこなふといましむべし。

行多隱僻

前にも記おく君子ハ屋漏にも恥ずと云て
そとく人の知ざる内の心又ハ胸中にも一念にて
も悪きに謹独故より内外の色をそろへるべし一つ
ハ天理にかなふ悪人ハ凶天理を恐れざる
故より行ふ人ハ少くして外様へハおもむかし

この業の文僻く不正事のまちがひハ手づさ
まどゝも天ハ是をとらしめたまひてを急僻のうす。
終りハ病死し大なる恥辱をうくる時後悔も
まどゝもかひなかるべし。必ず慎み守るべし。

晦臘歌舞朔旦號怒。

晦とハ毎月の晦日なり。臘ハ一年に八ヶ月
あり。　正月朔　五月五　七月七
十月朔　十二月八
右此五ヶ日ハ道家にて殊に神を祭て臘祭
とせられバ此日の歌舞をいましめられたり。
是儒家に於てハ猶太忌事なれバされども歌
舞奏楽も是を其時あるべし。礼記に鄰有
喪春不相。里有殯不巷歌。適墓不歌としるし
たる是等の時にも奏楽あるべからずとなへ
あれ是を以てくはしく準じていましむべし。
今ハ朔旦とハ毎月の朔日なり。朔日ハ一月の初
なれバ一年の事とおなじくすぢめの其ハ是を
祝し身を祝して善と悦ぶべきなり。號
怒るハ其時の禍となりて必ずあるべし。

對北涕唾及溺。對竈吟詠及哭。

北ハ北辰。北極の星なりにして道あり於て是
とする。今家に用ゆる時ハ律家なれども
あてゝつかふべし。竈神の事ハ前にもあらはさ
れぬる不なり。故ニ又是といはず。

又以竈火焼香。織此木作食。

神前に香を焼ばみなを没みえ閑由べし。
食事を調ふ火ハ織し。又織ハ業薪を
用て。食物を煮調る。竈神とけがし尚
又食すれば淨乃氣を解穢立方あるべからず。

夜起裸露

裸露とハ。赤裸になりぬぐ。五体を露とあらはす
ハあらはにするところへ九ぶ礼乃儀と云べし。

八節行刑

一年ハ八節あり。立春。立夏。立秋。立冬。
春分。秋分。夏至。冬至なり。此八ツの節ハ一年乃
氣の変じ換る時なれバ道を変じると知べし
人ハ此氣を新にして我邪氣を正しく
正氣におさまるべからず。さらに安静に養ざる故と
ならぬ。安静にして養ざりぬるとき八節と
云へ其何乃ときやへもなく人を殺し傷ぞ。

悪逆なる事甚し。

唾二流星一。指二虹霓一。輙指二三光一。久視二日月一。

是皆道家の書に見へたり。流星。虹霓ハ天地陰陽の変気なれバ。おそれ又天地の気を崇尊ぶべきなり。三光ハ日。月。星なり。指久視ハ皆我けがらハしき気をもつてむかへバ。天の気を觸穢す。故に凶いましめあり。

春日燎レ獵

燎獵とハ山野に火を放て。禽獣をやきがりしくるゝとなり。春月ハ万物発生の時也。是天地発生の気を破。尚又こもりを殺す。甚仁道に背けり。礼記月令にいはく。孟春之月。犠牲毋レ用レ牝。禁二止伐一レ木。毋レ覆レ巣。毋レ殺二孩虫胎夭飛鳥一とこそ。聖人ハ仁没なれバ。又是を同じ。

対レ北悪罵

人ハ謹事第一口より出ハ是禍の門にて又ハ口を守事如レ瓶とハおさへ緒くくりきてべからざるハ言語なりが。凶思ひ患ふくして不向て悪口をいハヾ。人又我を悪口をそしらまじバ

向の悪口と我もまたひくにあらざるや。況や
此を射して悪言し罵りハ。天誅を懼るゝ
べし。悪言と教ゆ。

無故殺亀打蛇

生ものゝ四霊あり。所謂麟。鳳。亀。龍なり。
就も亀と蛇とハ北方玄武の象にしてすこぶる
て故なくして殺すを何の故もなくして殺
しけバ。是悪なり。

如是等罪。司命随其軽重奪其紀算。算
尽則死。死有余責殃及子孫。

篇に於て。第六章の一章とむすびていさむる之
右條々の罪悪あるときは。右より記す所の司命神。
その悪の軽重に随ひて。おほくの紀算を
奪ひたまふ。紀算つくるときハ死す。尚又死し
て後も悪のむくひ責あるときハ。其殃子孫に及
ありむかしよりの道理の尊きことして敢て差
なし。易曰。積善之家有余慶。不積善
之家有余殃。といへる書を捨きこと思ふべ
し。すべて草木の種をうゑるがことく
ごと草木を生じ。善を蒔ハ福の生ず。

悪を植ゑハ禍の生ずる事。又是に同じかるべし。

○横取枉殺章第七

此章ハよこしまに人の財をとり。及び枉て人を殺すの罪を述ぶるなり。

又諸横取人財者乃計其妻子家口。以當之。漸至死喪。若不死喪。則有水火盗賊遺亡器物。疾病口舌諸事。以當妄取之直。

又よこしまに人の財宝をとる者にハ。その身のまさにひいふに及ぼして。我宝とせられの妻子やともび我一家に養ふ所の眷属まで我がうばひとりし罪を計つて。天より禍をくだしておひ／＼漸くに死しうしなはしめ。又死さゞれバ或ハ水火の難にあひ。あるひハ盗賊に災おほく我財宝をうしなひ。或ハうばはるゝか。あるひハ疾病ありて口舌出来して。後に斤時も安き事なし。是の余妄りに人の財をとりたるの報いなり。天より下し給ふ直道なり。

又枉殺人者是易刀兵而相殺也。

天理に背き枉て人を殺せし者ハ。天様其是とふ

くミのへ故に向を殺しる刀兵を募て。
又殺しる人を殺して但一の命を絶るのみか
此業なまハそのへ官に縛られ刑罰を
ほうさじの身となる人を殺して。即内に
難事ありてことへども。かも天理を枉て殺さ
バ天又之を人を殺しまふべし。況りハ其人を
所く殺ぎ生じいと。主人に讒して其人を害し。
他人をも死く其人を殺しても同ジことなて
殺して(い)かろう事ろし。及び巫醫の類も。
人の生死を説かれなまはぐの術

を丹術しくがなるのとよそこそ不わるべかし
や辭しさきく人をそこそふ事かゝるべしおろ
おやまれく人を殺さば。天誅をかふるべし。

取非義之財者。譬如漏脯救饑。鴆酒止渇。非不暫飽。死亦及之。

漏脯とハ。乾肉ヲ屋漏水ニ浸セバ則有毒。鴆ハ。
鳥ノ名。羽毛ヲ取テ酒ニ入テ食スレバ殺人。
此一節親切なろ所なる非義の財宝とろろ
者れ禍の事をとるハ漏脯の毒を含て
饑をまくひ。鴆酒の毒を飲でたゞ

かの濁と庭むさぼらしめば餓渇とやしまば又ち
まで死するぞかし。此義乃財とりあつめくるとも
此国家とたとへても又光に同じくごとくは
うろほかるときは則天罰ありて利せず。しかれば
善明かにして国家ありへん、清揆正しく而
ゆるうせりおもふべしとぞ。

○起心悔禍章第八

此章は人の一念を起すときは善悪の六
つの道ありて悪念をひるがへせば則
善心なり。故に此章は人の心の起るをのみ
よる禍と悔まして善なる事を述つるなり。

夫心起於善、善雖未為、而吉神已随之。
心起於悪、悪雖未為、而凶神已随之。

此一節は人心の動ども此の細微のことを論ず。
凡一念を善に向て起すときは身にいまだ
善を行ざれども吉神すでに随て福を
降しまふ。又一念を悪に向て動は身に
いまだ悪事を行はざれども凶神すでに降り
禍をくだし給ふ。天道は人間の一理にして差
別なし。人は喜怒を生ずるものなれば

これは天も又怒りたまふ。是則前に記すところの
形あれば影随ひ。声あれば響の出るがごとし。感
應のはやき事知るべしや。
其有曾行悪事後自改悔。諸悪莫作。衆
善奉行久々必獲吉慶。所謂轉禍為福也
此一節。老子の叱咤して人を教へ給ふぞ
さいはひ人は悪事をなすといふとも今より
たとひ自ら前の行跡を悔暁りて悪
を止て行ひを正しく衆の善事を奉
じ行ひて久しく是を積ば必吉慶を得るとぞ。

万事なりとまふすべし。是則禍を転変し
て福となすところの大切なり。又学問といふは。
道を知ることなり。今日顔面の気質の病を
まもりの天理に復せんがためなり。本性を
論ずるときは聖人も愚人もかはる事なし。
気質の病あるときは則天理を安じがたし。
愚人は気質の病ありて悪く流れて天性を
暗くし病を持つゆゑ聖人の学問の
道と万事に流しわひくを理めて五經を
明らかにせずば、と云ふ人は愚昧未練の人

なれバ人の形として都く貪欲の心なく
事と悔恨く房で善を行ことハ気質
と変じて賢人君子の壊りをんす我が
跡とをしむることにてあらずとに至つて作貪
歎なり向く盃积躬久道を示しをあれハいん
ぞやめる事あるんハ人といふハおもむきも天下
鏡明なるにいハ善悪の二門を知るざる者なり。
むりハ知までも身に行ざるハ守系知らざるか
貪歎にてしるしくかるる知るるべしや深く
可痛可惜ことなり

○結竟善悪章第九

此一章ハ感應篇一部の統なるものハ人の善悪の二字をもつて一篇を結竟の所なり。

故吉人語善視善行善。一日有三善。三年天必降之福。凶人語悪視悪行悪。一日有三悪。三年天必降之禍。胡不勉布行之。

此一節上の章の心をうけて故にといふ。人の心ハうまれつきあしき事を述られしによれてごとく善悪の二門ハ只一念のうちにありてとハ云へども実に志あるしとは事ハ功を積

此後ありとも善人ハ口より禍のしれざる言を
いはず目より視ずして又善ならざれバ身に動かず
善ならざれバ一日の間にも此三善あれバ
三年と怠らずして毎日に執行ひて三年と
積めバ天必ず其人に降したまふに福をもつてし
たまふとなり。孔子の弟子に示したまふにも非礼
勿視。勿聴。勿言。勿動と教へたまふも。則同じ。
又凶人ハ是よりうらはらにて不善を好みて眼よ
悪を視。身にも悪を動かし。此三悪を一日より
性ろは三年積バ天必禍を降したまふ。恐べし

人たる者何ぞ此を知らずして善道を
もとめずして縦悪事を執行ひやしなはんや
○此書始よりは善悪の報如影随形と説
おしへ一篇の終りまでは又善悪共に積ること
久しければ必ず禍福のあらはるゝ事を
説く。結ぶ所ハ経典の語をもつてしるすは
老の若も万代の愚蒙をいましむる仁心
なりけり。

右此一書ハ述るところハ三尸司命ノ神。三台
北斗ノ神または奪紀筭などいへる事
儒書にも於くハ未聞ところ。然れども
前よりいへるごとく善悪の二門を挙て。
勧善懲悪。教を厳密なるがために人
のこゝろみなり。然れば悪をば恐れつゝしみ善
をばよく勤むるときハ何ぞ道の害あ
らん。若一念も此書に依りて己が極を
聖経より極めずして則ち己が邪に
走るべからず。帝 漂泊して寄陽りる也

はゞある人此書を携来て強て和解を
求るより據なく不得已して妄り俗語と
以て一篇と述ぶのみ。さこそ嘲多からん。後来
かくぞれし是を示しおくものを。

于時延宝八臘月既望
崎陽放棲後学南部草壽稿

大坂書林　河内屋八兵衛

胡子